

かなじよ

きのつらゆき

仮名序

(紀貫之)

やまとうた

ひと

こころ

たね

倭歌は、人の心を種として、

ず　こと　は

よろづの言の葉とぞなれりける。

よ　なか

ひと

しげ

世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、

こころ

おも　う

み

き

心に、思ふことを、見るもの聞くものにつけて、

いい　いい

はな

な

うぐいす

言ひ出だせるなり。花に鳴く鶯、

みず

す

わ　ず

こ　え

き

水に住むかはづの声を聞けば、

い

い

生きとし生けるもの、

ず

う　た

いづれか歌をよまざりける。

ちから

あめつち

う　ご

力をもいれずして、天地を動かし、

め　み

おにがみ

わ

おも　わ

目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、

おとこおうな

なか

わ

男女の仲をもやはらげ、

たけ

もの　の　ふ

こ　ころ

な　ぐ　さ

う　た

猛き武士の心をも慰むるは歌なり。



仮名序 解説

和歌は人の心を元にして、様々な言葉になったものだ。この世に生きる人は、関わる出来事や行為が多いので、それについて心に思ったことを、見るもの聞くものに託し、表現しているのだ。

花木の上で鳴く鶯や、川に住む河鹿蛙の声を聞くと、いったいどんな生き物が歌を詠まずにいられようか。いや全ての生き物が歌を詠むのだ。

力も入れずに天地を動かし、目に見えない恐ろしい神をもしみじみと感動させ、男女の仲も親しくさせ、勇猛な武士の心も慰めるものは、歌なのだ。

＊春の鶯の声や、秋の河鹿蛙の声を動画サイトなどで聞いてみると、子どもも当時の人々の心を想像しやすくなるのではないかと思う。

かすがの と ひ のもり い み
春日野の 飛ぶ火の野守 出でて見よ

いまいくか わかなつ ん

今幾日ありて 若菜摘みてむ



解説
かいせつ

かすがの ならこうがい ちめい ならこうえんしゅうへん
春日野とは奈良郊外の地名で、奈良公園周辺のことである。

と ひの と ひ のろし せっち ばしよ いみ
飛ぶ火野とは飛ぶ火 (烽火) が設置されていた場所を意味している。

もり ばんにん
守とは番人のこと。

もり ばんにん そと で のはら ようす み すうじつ
守 (番人) よ、外に出て野原の様子を見てみよ。あと数日たったらきつと

わかな つ おも うた
若菜を摘もう思うと歌っている。

げんざい はる ななくさ こと ゆき き めぶ わかな つ
現在の春の七草とは異なるが、雪が消えて芽吹いてきた若菜を摘むことを、

こころま ようす つた
心待ちにしている様子が伝わってくる。

とうじ おな て はい
* 当時と同じものは手に入らないかもしれないが、ふきのとうや身近な野草
(つくしなど) を摘み、子どもと春の恵みを味わってみよう。

おおしこうちのみつね

春歌上 四一 (凡 河内 躬恒)

はる よ やみ うめ はな
春の夜の闇はあやなし 梅の花
いろ み か わかく
色こそ見えね 香やは隠るる



かいせつ
解説

はる よ やみ どうり あ うめ はな いろ み
春の夜の闇は道理に合わない。 梅の花の色は見えないが、 香りは隠せるの
だろう。 いやはつきりと香ってきて隠せはしない。

やみよ ただよ うめ はな かお いま つた うた
闇夜に漂う梅の花の香りが、 今にも伝わってくるような歌である。

はる はや つつ うめ はな かお し こ め と こずえ
＊春をいち早く告げる梅の花の香りをまだ知らない子どもは、目を閉じ、梢
に顔を近づけ、 香りを楽しんでみよう。

春歌上 三一 (伊勢)

はるかすみ た みす 春霞 立つを見捨てて行く雁は

はな さと すみ 花なき里に住やならへる



解説

春霞が立って、もう花が咲く頃なのに、それを見捨てて北国へ旅立った雁は、花のない里に住み慣れているだろうか。

霞は春の最初の風物。和歌では秋の霧とは使い分ける。雁（ガンとも言う）はカモ科の水鳥で白鳥より小さく、カモより大きいものの総称である。雁は秋に日本に来て（来雁）、春に北国へ帰る（帰雁）。

見捨ててという表現から、花の美しい春を愛でる気持ちと、春なのに寒い北国へ帰っていく雁への驚きの感情がうかがえる。

子どもと一緒に、身近にいる渡り鳥に心を寄せてみると、いつもと違った景色が見えるかもしれない。

みわた

やなぎさくら

見渡せば 柳桜を こきまぜて

みやこ

はる

にしき

都ぞ春の 錦なりける



かいせつ

解説

こだか

へいあんきょう

みわた

やなぎ

さくら

い

ま

（小高いところから平安京を）見渡してみると、柳と桜が入り混じり、

みやこぜんたい

はる

にしき

都全体が春の錦のようだなあ。

ならじだい

まんようしゅう

はる

はな

うめ

しゅりゅう

へいあんじだい

奈良時代の万葉集では、春の花といえは梅が主流であったが、平安時代に

さくら

はる

はな

だいひょうかく

は桜が春の花の代表格となっていた。

うた

うすべにいろ

さくら

ふうけい

にしき

みた

この歌では、薄紅色の桜の風景を錦に見立てている。

たかだい

いちめん

ひろ

さくら

かんしょう

ばしょ

うつく

おりぬの

＊高台から、一面に広がる桜を鑑賞できる場所があれば、美しい織布の

けしき

こ

たいかん

おも

ひやくぐん

いっけん

ような景色を子どもも体感できると思う。百聞は一見にしかず。

春歌下 八四 (紀友則 きのとものり)

ひさかた ひかり はる ひ
久方の光のどけき春の日に
ず ころこ はな ち ん
しづの心なく花の散るらむ



かいせつ
解説

ひかり はる ひ
光がのどかな春の日に、桜の花はどうしてそんなにせわしく散っていく
のだろうか。

はる ひ のど じょうけい はな お きも つた
春の日の長閑やかな情景と、花を惜しむ気持ちが伝わってくる。

ひやくにんいっしゅ
百人一首 (三三) に選ばれており、桜を詠んだ和歌の名歌である。

はなみ たの さくら ち みち こ いっしょ さんぽ
＊にぎやかな花見も楽しいが、桜の散る道をただ子どもと一緒に散歩する
だけでも、この歌の心を感じられると思う。

濡れつつぞ 強ひて折りつる 年のうちに

はる いくひ

おもえ

春は幾日も あらじと思へば



かいせつ
解説

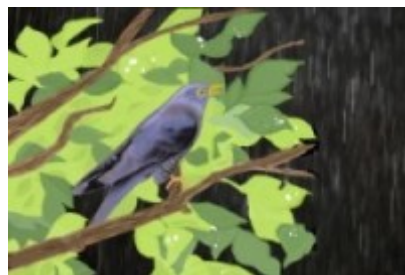
雨に濡れながら、（藤の花を）無理に折った。今年の春はもう何日もない
とおも
と思うので。

ことばき
詞書によると、藤の花を折って人に贈った歌とある。

ふじ はな はる お
藤の花は春の終わりの花で、過ぎゆく春を惜しむ気持ちを表している。雨の
なか お すかた そうぞう
中わざわざ折った姿を想像すると、花を贈った相手と春を惜しむ気持ちを
わ あ
分かち合いたいという心が伝わってくる気がする。

ふじだな みあ ととき じぶん きも
＊藤棚を見上げた時、自分ならどんな気持ちになるだろうか、子どもと語
ってみてもおもしろい。

さみだれ ものおもいお ほととぎす
五月雨に物思ひをれば時鳥
よふか な ず
夜深く鳴きて いづちゆくらむ ん



かいせつ
解説

さみだれ ふ なか ものおも
五月雨が降りしきる中、物思いにふけっていると、時鳥よ、深夜に鳴いて
どこへ飛んでいくのだろう。

さみだれ つゆ ほととぎす なつ だいひよう とり
五月雨とは梅雨のこと。時鳥は夏を代表する鳥である。
ほととぎす か とり たか こえ
時鳥はカッコウ科の鳥で、高い声で「キョキョキョ」と鳴く。
ひとこえ な と さ ほととぎす ものう きも
一声鳴いてどこへともなく飛び去る時鳥のように、物憂い気持ちがか
と き ねが
に飛んで消えてしまえばいいのにと願っているようにも感じる。

しんや なや こ りかい
＊深夜の悩み事は子どもには理解しづらいかもしれない。
もり なか ほととぎす こえ どうが おんせいつきずかん き
森の中にいるかのような時鳥の声を、動画サイトや音声付図鑑で聞いてみ
るだけでも、歌の情景を想像しやすくなると思う。

なつ よ よい あ
夏の夜は まだ宵ながら明けぬるを

くも ず つき ん
雲のいづこに 月やどらむ



かいせつ
解説

なつ よ よい ひぐ ご よなか じかんたい おも
夏の夜はまだ宵 (日暮れ後から夜中の時間帯) と思っていたのに明けて
しまったが、雲の中のいったいどこに月が宿をとっているのか。

ひとばんじゅう つき なが す あつ ねむ
一晩中、月を眺めて過ごしたのだろうか。暑くて眠れずにいたのだろうか。
よ あ お うた
夜が明けることを惜しむ歌である。

よ あ はや つき にし しず くも なか やど
こんなに夜明けが早くては月も西に沈めないと (雲の中に宿っていると)、
つき ぎじんか ひやくにんいっしゅ えら
月を擬人化している。百人一首 (三六) にも選ばれている。

あさ ねむ こ よ あ お むずか
*朝までぐっすり眠る子どもが夜明けを惜しむのは難しいかもしれない。

「こんばんはおつきさま」など月と対話する児童書が多数あるように、月
ぎじんか かんかく あんがいこ ほう た あさはや お
を擬人化する感覚は案外子どもの方が長けているかもしれない。朝早く起
きて、月がどこにいるのか話してみるのもたのしいと思う。

夏歌 一六八 (凡 河内躬恒)

おおしこうちのみつね

なつ あき ゆ うそら かよいじ
夏と秋と 行きかふ空の 通ひ路は

えすず かぜ ふく ん
かたへ涼しき 風や吹くらむ



解説
かいせつ

なつ あき ちが そら つうろ かたがわ すず かぜ ふ
夏と秋とがすれ違う空の通路は、片側は涼しい風が吹いているのだろうか。

とうじ そら いくうかん い き つうろ かんが
当時、空には異空間を行き来する通路があると考えられていた。

こ 子どもにとって、空を眺めて季節を感じることは少々難しいかもしれ
ない。あき さまざま くも で ぐも あき かん くも すがた おやこ
秋には様々な雲が出るので、うろこ雲など秋を感じる雲の姿を親子
で鑑賞してみると、季節の移ろいを空から感じられるのではないだろうか。

はるかすみ

春霞 かすみでいにし 雁が音は

かり ね

いま な

あきぎり うえ

今ぞ鳴くなる 秋霧の上に

かいせつ
解説

はるかすみ

なか

と

た

かり

いま

あきぎり

じょうくう

な

春霞の中を飛び立っていった雁が、今、秋霧のかかった上空で鳴いてい

るのが聞こえる。

かり

雁については春歌上・三一の解説を参照。

かいせつ

さんしやう

うた

はる

きがん

あき

らいがん

どうじ

よ

この歌は、春の帰雁と秋の来雁を同時に詠んだものである。実際には雁は見

じっさい

かり

み

えないが、鳴き声で雁の到来に気付いている。

な

こえ

かり

とうらい

きづ

＊マガンやハクガンなどの声を動画サイトで聞いてみることもできる。現在

こえ

どうが

き

げんざい

でも渡り鳥の存在は、「またこの季節が巡って来た」という特別な感慨が

わた

とり

そんざい

きせつ

めぐ

き

とくべつ

かんがい

ある。身近な渡り鳥について調べてみると、子どもにとって多くの発見が

みぢか

わた

とり

しら

こ

おお

はっけん

あると思う。

おも



秋歌上 二一四 (壬生忠岑)

みぶのただみね

やまざと あき

山里は秋こそことにわびしけれ

しか な ね め さ

鹿の鳴く音に 目を覚ましつつ



かいせつ
解説

やまざと

あき

とく

さび

山里は秋が特に寂しいのだ。

しか

な

こえ

鹿の鳴く声にたびたび目を覚まして寝つけず

にいるよ。

よる

な

しか

こえ

どうが

き

*夜に鳴く鹿の声を動画サイトで聞いてみたところ、本当に物悲しくなるよ

なん

い

こえ

うな何とも言えない声であった。

やま

なか

ひとり

山の中に一人となれば尚更であろう。日頃

とし

く

ひと

やま

都市で暮らしている人は山にキャンプに行ってみるとよいかもしれない。

ま

くら

おと

よる

せかい

す

真っ暗で音のない夜の世界を過ごしてみると、子どもにとって、よい体験に

おも

なると思う。

秋歌下 二五七

(藤原敏行
ふじわらのとしゆき)

しらつゆ いろ ひと

白露の色は一つを いかにして

あき こ は ちぢ そ ん

秋の木の葉を 千々に染むらむ



かいせつ
解説

しらつゆ いろ しらいっしょく

白露の色は白 一色なのに、どうしてあのように秋の木の葉を千もの色に染

あき こ は せん

いろ そ

めたのだろう。

ちゅうごく

ひろ

ごぎようせつ

中国から広まった五行説において、

あき いろ

しろ

秋の色は白とされていたため、

あき

つゆ

秋の露

しろ

かんが

も白と考えられていた。

もみじが

こ

はあつ

*紅葉狩りもよし、木の葉集めもよし、

いま

むかし

か

今も昔も変わらずに人の心をとら

ひと

こころ

あき うつく

おやこ たの

える秋の美しさを、親子で楽しもう。

秋歌下 二七七 (凡 河内 躬恒)

こころ お おん はつしも
心あてに折らばや折らむ 初霜の
お わ しらぎく はな
置きまとはせる 白菊の花



解説

あ お お はつしも お いちめん しろ みわ
当てずっぽうに折るなら折ろうか。 初霜が下りて一面の白さと見分けのつ
しらぎく はな
かなくなった白菊の花よ。

ひやくにんいっしゅ えら めいか
百人一首 (二九) にも選ばれた名歌。

あき ひかり あ いちめん しろ かがや うつく にわ そうぞう
朝の光を浴びて一面に白く輝く美しい庭が想像される。

へいあんじだい わか
奈良時代の万葉集では菊は読まれていなかったが、平安時代には和歌の
だいざい
題材となった。

わか せだい きく はな かんしやう きかい すく
❖ 若い世代であると、菊の花を観賞する機会が少ないかもしれないが、菊花
てん きく
展や菊まつりに、子どもと出かけてみよう。

冬歌

三三〇

（清原深養父）
きよはらのふかやぶ

ふゆ 冬ながら 空より花の 散りくるは

くも 雲のあなたは 春にやあるらむ



かいせつ
解説

ふゆ 冬なのに空から花びらが舞い散ってくるのは、くも 雲の向こう側が春だからだ
ろうか。

じっさい 実際には雪が降っているのに、くも 雲の向こう側が春だから花びらが散ってくる
のかと詠んでいるとは、そうぞうりよく 想像力の豊かさに大変驚かされる。はる 春を待ち焦が
れるきもちもあつたのかもしれない。

＊じつと春を待つ。待つこともたのしむ。そんな静謐な時の中に身を置いて
いると、しぜん 自然と空想の世界が広がっていくのだろうか。

こ 子どもなら、またひと味違う愉快な空想をしてくれるかもしれない。

冬歌

三三二

（坂上是則）
さかのうえこれのり

あさ ありあけ つき み
朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに

よしの さと ふ しらゆき

吉野の里に 降れる白雪



かいせつ
解説

よる ありあけ つき ひかり おも
夜がうっすらと明ける頃、有明の月の光と思うほどに、吉野の山里に白雪
が積もっていることよ。

あさ よ あか ちよくぜん
朝ぼらけとは、夜が明けて明るくなる直前のこと。

ありあけ つき よ あ そらのこ つき
有明の月とは夜が明けてもまだ空に残っている月のこと。

ひやくにん いっしゅ
百人一首（三一）にも選ばれている。

ひ でちよくぜん そら うつく すうふん できごと いっしゅん
＊日の出直前の空の美しさは、ほんの数分の出来事である。その一瞬の
ゆきあか とら ゆき ちいき す こ むずか ゆきぐに い
雪明りを捉えるのは、雪のない地域に住む子どもには難しい。雪国に行く
きかい はやお こ よ あ ゆきげしき み
機会があれば、早起きをして子どもと夜明けの雪景色を見てみよう。